

## 支援の現場からみた児童虐待の現在

### 一言説としての「世代間連鎖」を考える

Realities of child abuse from the viewpoint of support staffs in child welfare institutions  
—Reconsidering "intergenerational transmission" theory in child abuse

原 くるみ

Kurumi Hara

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 現代社会研究専攻 修士課程

キーワード：児童虐待，世代間連鎖，児童福祉，支援施設

Key words : Child abuse, Intergenerational transmission, Child welfare, Support institutions

#### 1. 研究目的

今日、日本では児童虐待問題への関心が高まっている。2019年6月に児童虐待防止法が改正され、保護者による体罰が法律で禁止されるなど制度面でも取り組みが進められてきているが、他方で児童相談所での児童虐待相談対応件数は増加の一途を辿っている。児童虐待の発生要因をめぐる議論では、保護者側の要因が挙げられることが多く、「世代間連鎖」と呼ばれることも少なくない。これまで児童虐待の世代間連鎖の議論がなされると、多くの場合その対象は母親であった。

そこで、本研究では、「世代間連鎖」を言説としてとらえる視点と、ジェンダーと家族の視点から児童虐待について考察し、児童虐待が社会問題となっている現代社会で、子育てを支えるために必要なことは何かを検討していく。

#### 2. 研究実施内容

研究方法としては、2009年実施の第3回全国家族調査(NFRJ08)の二次分析を通して、児童虐待の背景にある問題を考察する。その知見を背景に、児童虐待の支援の現場に関わる支援者へのインタビュー調査から、支援の現場からみた現在の児童虐待とその支援の状況を明らかにする。

先行研究からは、児童虐待を家族や親、子ども個人の問題に由来する問題だと捉えられる傾向があることを明らかにした。児童虐待防止のために用いられているアセスメントもまた、個人的な特質をリスク要因として扱っている。児童虐待の「世代間連鎖」に関しては、前提としてその担い

手を母親としており、母親のみが子どものときの被虐待経験を連鎖させるようにもとれるような議論の仕方がなされている。

このように児童虐待の要因を個人とみることで、なぜその個人がそういった状況に置かれているのかという問題を見えなくしてしまっている。リスク要因とされる問題をなぜ抱えているのか、表面的なことだけでなくその背景にまで問題を見ることが必要であり、そのようにして虐待の連鎖を防げることが示唆された。

第3回全国家族調査(NFRJ08)結果の二次分析では、男性であれ、女性であれ、育児や家族への不安感が大きい人ほど虐待傾向が高くなるという結果が得られ、性別を虐待の要因として説明できなかった。しかしながら、日本において若年で親になる男性、育児や家族への不安感が強い男性にも対応できる支援はあまりにも脆弱ではないだろうか。母親だけでなく、父親も育児について相談できる豊かな環境、支援が必要である。

インタビュー調査では、児童相談所、婦人保護施設、母子生活支援施設、アフターケア相談所といった児童虐待にかかわる4つの異なる施設の具体的な支援について明らかにしていくことにした。

児童相談所は、「子どもを守るところ」であり、基本的な考え方は子どもたちのために家族再統合が必要だとしている。子どものための施設であるならば、裁判所などが介入し、親と子どもそれぞれの状況をしっかりと理解しながら本当に子どものために必要な支援を行なっていく必要がある。

婦人保護施設では、利用者の多くに被虐待経験があり、そのためにトラウマ障害などを持ち日常生活でさまざまな困難を抱えていた。そういった母親の背景も踏まえながら、子育てへの支援が必要であり、必要な人が必要な支援を得られるように、そのハードルや偏見をなくしていくことが重要であることがわかった。

母子生活支援施設では、生活型の施設だからこそ毎日、母親の相談を受けることができ、母親も子どもも今まで過ごしてきた以外の生活の仕方や考え方に気づくことができるようになる。また、母親に対して、母親としての支援だけでなく、女性としての支援も行なっていくことで母親の自立とそれに付随する母子の自立が見込めるという支援のあり方が明らかになった。

アフターケア相談所では、虐待で受けたトラウマを抱え、親や家族を一切頼ることができず、低学歴・無資格という幾重にも重なるハンディを背負いながら、社会での生活を余儀なくされる子どもたちの状況が明らかになった。社会的養護を離れた後も生きるために必要な支援と繋げる同行支援と居場所づくり、さらに就労・学習支援といった次のステップに進むための支援が長期的に必要な状況がわかった。また、被虐待者の支援だけでなく、加害者である虐待者への支援も「被害者支援」として必要とされていること、自分自身の行動について悩んでいる親の多さについても明らかとなった。

支援者の語りから、児童虐待の予防や防止には、「正しい母親像」を押し付けられない社会のあり方や、子育て中の母親を支える第三者の存在、そして必要としている人に必要な支援を繋がられるということが不可欠であることがわかる。いずれの施設においても人員不足が問題としてあり、支援の質を上げるためにも支援員の数や働き方について見直されなくてはいけないだろう。

### 3. まとめ

これまでの児童虐待の発生要因をめぐる議論では、保護者側の要因が挙げられることが多く、「世代間連鎖」の議論においては、前提として「世代間連鎖」の担い手を常に母親としており、父親の「世代間連鎖」に関する問題は全くみえてこなかった。

しかしながら、第3回全国家族調査 (NFRJ08) の二次分析では、性別ではなく、育児や家族への

不安感が大きい人ほど虐待傾向が高くなるという結果が得られた。

これらを踏まえ、児童虐待の支援の現場に関わる支援者へのインタビュー調査からは、本来はその母親ごとに子育ての方法があつて良いはずなのに、「正しい母親像」を押し付けられ「ダメな母親」にされてしまうこと、そして社会制度の問題であるはずの事柄が個人の問題とされ、リスク要因として扱われる母親たちの状況が明らかになった。児童虐待の要因自体を家族や個人に還元するため、その社会制度の問題性についてはみえにくくなっている。また、親族に限らず、信頼できる大人の存在が児童虐待の予防や抑制に重要だということが明らかになった。しかし現在の日本では児童虐待の支援として、施設に入れば信頼できる大人の存在を得ることができるが、それ以外では親族以外でそのような存在を見つけるのは難しいという問題があるのではないだろうか。

子育てを支えるために社会に必要なことは、児童虐待を家族や個人の問題として捉え、「世代間連鎖」を母親の問題に帰すのではなく、児童虐待は社会の問題であることを改めて理解して、支援体制を整えることだと考える。

### 主要参考文献

- [1] 上野加代子, 1994, 「児童虐待の社会的構築—一言説にみる問題の帰属」『ソシオロジ』39 (2): 3-18.
- [2] 上野加代子, 2006, 「リスク社会における児童虐待—心理と保険数理のハイブリッド統治」『犯罪社会学研究』31: 22-37.
- [3] Kaufman, J and Zigler, E, 1987, “Do abused children become abusive parents?,” *American Journal of Orthopsychiatry*, 57: 186-192.
- [4] 田中理絵, 2011, 「社会問題としての児童虐待—子ども家族への監視・管理の強化」『教育社会学研究』88(0):119-138.
- [5] 森田ゆり編, 2018, 『虐待・親にもケアを：生きる力をとりもどす MYTREE プログラム』築地書館.